

こしえるびと

つむぐストーリー vol.128

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

自分の手でものを作る

広大な山々と水田が見渡せる平泉町内の一角、ピーマンの収穫作業にいそしむ千葉翔太さんの姿がある。

高校卒業後、進学のために上京し、そのまま都内でビルの電気設備工事の仕事に就いた。業務内容は工事の指示や管理といったもの。やがて、現場で手を動かす職人の姿にうらやましさを感じるようになった。「自分の手でもものづくりをしたい」。岩手に戻り、鉄鋼を扱う企業に転職。溶接作業などを中心とした業務に当たった。しかし、できることは一つの製品を作る中の一工程に過ぎない。「一から十まで全て自分で手掛けたい」というチャレンジ精神が湧いてきた。そんな業界がどこかにないか…。翔太さんがたどり着いたのが農業だった。

失敗からのスタート

退職後、平泉町に帰郷した翔太さんは、J A 平泉カントリーエレベーターでアルバイトを始めた。もみを搬入しに来る生産者や、一緒に働くJ A 職員と交流を深める中で、農業を始めるに当たってのアドバイスをもらうことができた。さまざまな話を聞き、翔太さんはピーマンを栽培することに決めた。1年目は2㌥で露地栽培に取り組んだものの、思い通りにいかず、少ない収量に終わってしまった。反省点を踏まえ、2年目以降は露地よりも生育が安定しやすいハウス栽培を導入。圃場には、J A 平泉水稲育苗センターの育苗後のハウスを選んだ。「家から遠くない場所にあり、設備にかかる初期投資を抑えられるのが魅力だった」と当時を振り返る。

安定した生産に向けて

ハウス栽培を取り入れてから、収量の伸びに手ごたえを感じている翔太さん。1年目に1㌥だった収量は、今では年間10㌥までになった。今後はさらに生産規模の拡大に挑戦していく予定。また、夏の暑さが厳しさを増す中、発生が早期化する病害虫の防除にも注力したいという。

そんな翔太さんが気に掛けているのは、平泉町内にピーマン農家が少ないこと。トマトやナスの生産者と比較するとまだまだ少ないと感じる。「自分の手でもものを作り出す喜びはとても大きい。この喜びを分かち合える仲間が増えてほしい」と期待する。「自分を起点に、平泉町のピーマン生産を盛り上げていきたい」。未来へ向けて、翔太さんは一步一步進んでいく。

「ものづくり」ができる農業を楽しむ

平泉町平泉 千葉 翔太さん



PROFILE

千葉 翔太さん (33)

Shota Chiba

平泉町平泉

1992年平泉町平泉生まれ。高校卒業後、工業系の専門学校に進学するために上京。都内、県内の企業に勤務したのち、地元平泉町で就農。ピーマン13㍑。両親、妹と4人暮らし。

